

宜野湾高校の生徒達へ（34）

2020.8.9

沖縄県は7月31日に県独自の非常事態宣言を行い、警戒レベルを3段階に引き上げた。これを受け、本校では8月11日(火)から8月14日(金)まで時差登校並びに短縮授業とすることとした。沖縄県では、児童生徒、教職員にも感染者が発生している。このような状況で、私たちはどのように対応すればいいのだろうか？4人の識者の話を聞いてみよう。

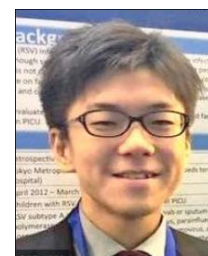
椎木創一氏（県立中部病院感染症内科）は、

新型コロナウイルスは地域に入ると**誰もがかかる可能性**がある。学校だけでなく職場でもそうだが、**感染した人を責めるのではなく、サポートすることが大切だ**。感染した友達や同僚を「頑張って」と励まし、どうサポートできるかを事前に皆で話し合っておくべきだ。
(琉球新報 7/25:一部引用)



張慶哲氏（南部医療センター小児感染症内科）は、

そもそも子どもに限らず、この**感染症は誰にでも起こり得る**。たまたま、周辺で最初に感染が分かっただけの可能性もある。感染した人の行動を責め立てるなどし、感染した人が悪いかのように考えるのは無益かつ危険だ。大人に広がりつつある偏見が子どもの世界に広がらないようにする必要がある。**日常生活を再開しながら感染対策を継続するという難題**を両立させようとしている段階で、どうやっても**感染のリスクはゼロにならない**。できるだけリスクを減らすために、大人は率先して発熱などの症状があれば仕事を休む、「**3密**」を避けるなどの模範を示すことが求められる。
(沖縄タイムス 7/20:一部引用)



丹野清彦氏（琉球大学教職大学院教授）は、

現状を考えると、**子どもへの感染はいつ起きてもおかしくなかった**。どこの学校で感染者が出たのか知りたくなるのが自然な感情だと思うが、**感染者にとっては探られること自体がプレッシャーだ**。SNSで探ると**いう行為自体が、いじめだと認識**する必要がある。大人の不安やいらだちは子どもに伝わり、子どもの不安はいじめにつながる。保護者には思慮ある対応をしてほしい。
(琉球新報 7/21:一部引用)



上の3人に共通することは「新型コロナウイルスは誰でも感染する可能性がある」、「感染者を責めるのではなくサポートすることが大事」ということである。

ここで、新型コロナウイルスの蔓延で休校になったイタリア・ミラノのドメニコ・スキラーチェ校長が生徒に出したメッセージを紹介しよう。

外国人やよそ者を危険だと思い込んだり、**最初の感染者を突きとめようと躍起**になったり。「**“見えない敵”**がいたるところにいて、いつ襲われるかわからないという恐怖にとらわれたとき、私たちは本能的に、**同じ人間をむやみに脅威**に感じたり、**攻撃の対象**とを感じるものです」。
(朝日新聞 5/3:一部引用)

スキラーチェ校長は、日本の生徒に次のメッセージを寄せている。

この痛みはいつか、皆さんの財産となるでしょう。隔離された孤独な時間も、いつかは終わります。それは確かです。本を読み、考えることで、この孤独な長い日々を**無駄に失われた時間にせず、有益で素晴らしい時間**にしましょう。



同氏のメッセージに同感である。私がこれまで『宜野湾高校の生徒達へ(GIS)』を書いてきた原動力は、「新型コロナウイルスによる苦しい状況が続く中、校長として生徒達に何か出来ることはないか?」という思いであった。『GIS(12)』で書いたように、私たちは「不確実な未来に耐えなければならない」。その覚悟をもつ時、我々は一歩も二歩も前に踏み出しているのである。互いに励まし合い、感染拡大の予防策を徹底し、この難局を乗り越えていこう！
沖縄県立宜野湾高等学校長 津留一郎